

「ア、吃驚した、貴女何處から這入つといなはつたんや、ナニ、戸の隙間から、器用な身體やなア、併し見れば美くしいお方やが、貴女は一體なんや」

「お尋ねに預り、お恥かしい事乍ら、今、妾の申します事を一通り、お聞きなされて下さりませ」

（相方三味線、一ツ鐘）

「モシ、そんな處で芝居をしたら何うもならんがな」

「元妾は京都西陣織屋清兵衛の娘、小糸と申す者、父死去の後家は困却、其の日の煙のたて兼ねまするを、どう妾が見て居られましよう、大阪新町へ浮き川竹の勤め奉公に出ましたが、附出しの其日より、不圖馴染しお方が出来ました」

「フム、夜中に幽霊に起されて、惚氣まで聞かされたら充分や」

「互に變るな變らじと、言ひ交した仲、親方には、せきせかれ、一層此世で添へねば來世でと、無分別にも一心寺で情死、男は妾の死に姿を見て、其場を逃げ去り、おのれやれとは思ひますれど、お天とうさんに恐れ浮びも遣らず居りましたが、今日不圖貴郎様の結構なる御回向に預りお禮に参り見ますれば、貴郎様には未だ獨身そうに御座ります、逆縁ながら女房に……」

「モシ、ウダ／＼言ひなアンな、ナニ嬢に仕て呉れ、嬢は、モシそれ眞間だすか、それが眞間やつたら、私もヘンチキや、普通の嬢を持つたら面白い、ヘンチキの嬢に幽霊とは、コラしやれてる

嬢になつとくなするのんなら、晝の酒肴が残つて、チョット祝言の眞似事だけ、一ツ御免やす」

「お戴き」

「モシそんな妙な手を出しなアンないな、手を上へ向けて出しなアレ」

「手を上へ向けたら、幽霊仲間を省かれます、チョット御返盃を」

幽霊と酒盛を致しまして、其晩は寝て仕舞ました翌朝、此源助の隣に住ります男が胴籠の保平と言ふて、腰に胴籠をぶら下げて喜んで居る男。

「源さん、お早う」

「イヤ、保さんか、マアお這入り」

「お這入りやないで殺生な」

「何がやね」

「何がやないで、夜中に女を連れて歸つて來て、夜通しゴチャ／＼言ふて、耳障りで寝て居られへんがな」

「濟ん堪忍して、出し抜けに來依つたんや」

「出し抜けかしらんが、あんまり酷いで、私かて獨身や、チョット言ふて呉れたら、他所へ泊りに行てるのに、併し、今朝チョット壁の隙間から覗いて見たのんやが、宜い女やな源さん、あれは唯者